

高階の構造实在論と新カント派哲学

丸山 善宏

京都大学白眉センター・文学研究科／Oxford大学計算機科学科

現代科学哲学の实在論論争における有力な立場である構造实在論の起源の一つとして新カント派マルブルク学派のエルンスト・カッシーラーの哲学があるという認識は（構造实在論の提唱者の一人であるスティーブン・フレンチらの歴史研究を通じて）既に一般的なものとなっている。また数学の哲学の文脈においては、カッシーラー初期の著作『実体概念と関数概念』が（デデキントらの数理哲学と共に）数学の哲学における構造主義の立場を先取りしたものであったという認識も近年進んでおり、数学の哲学においてもカッシーラー哲学の意義が認められつつある。

さらに哲学一般の文脈においては、マイケル・フリードマンの近年の研究に象徴されるように、カッシーラー哲学は分析／大陸哲学の分断（The Analytic-Continental Divide）が生ずる直前のもので、歴史的に見ても分析哲学の発生段階（特に論理実証主義）にはカッシーラー哲学の影響が色濃く見られ、自然科学(Naturwissenschaft)と人文科学(Geisteswissenschaft)というディルタイ的対立を乗り越え両者を統合的視座に置く包括的哲学を展開したカッシーラーの『シンボル形式の哲学』は、現代哲学の分断状況や科学の細分化断片化を打開するためのキーとなるものであると捉える潮流が昨今特に活発になってきている。

本発表ではこのような現状を踏まえカッシーラー哲学の現代的意義について論じる。とりわけカッシーラーの構造主義的な立場は、現代科学哲学における標準的な構造实在論や現代の数学の哲学における構造主義の立場（或はカッシーラー以前のデデキント等の構造主義的立場）のいずれとも異なり、高階の構造をも捉えることのできる「高階の構造主義」乃至「高階の構造实在論」とも言うべき、より高次の構造主義哲学を導くものであると論じる。そして、構造实在論と圏論の関わりに関する近年の論争を踏まえながら、このような「高階の構造实在論」の立場こそ、圏論を哲学として捉えるための「圏論の哲学」として妥当なものであると論じる。

さらにこのような高階の構造实在論としての圏論という立場から、構造实在論においてよく知られている意味論的困難は、伝統的オーソドクシーである指示主義的意味論の不用意な採用により生じる問題であり、現代の推論主義的な圏論的意味論を採用することで解決されると論じる。加えてこのような推論主義的な見地は、科学における理論変化の過程において不変なもの／保存されているもの（即ち"何らかの意味"での構造）を見るという、現代科学哲学の文脈における構造实在論の元々の動機の一つをもより良く捉えることのできるものであり、「構造とは正確に言って何なのか」という構造实在論において屢々批判の対象となってきた根源にある概念的曖昧性を推論主義的な立場から解消することを可能にするものであると論じる。